

日本語版 20 項目相貌失認指標の開発と 信頼性・妥当性の検討

中嶋智史
(広島修道大学)

目的

近年、健常者の中で脳の器質的な損傷がみられないにもかかわらず顔の認識能力が著しく低い人々がいることが報告されており、先天性相貌失認 (Hereditary prosopagnosia: HPA) と呼ばれている (Behrmann & Avidan, 2005)。現状では HPA について明確な診断基準があるわけではないため、質問紙尺度や顔記憶テストなど複数の指標によって多面的に検討する必要がある。Shah et al. (2015) は HPA の特性について簡便に測定することができる 20 項目相貌失認指標 (The 20 items prosopagnosia index: PI20) を開発し、HPA と疑われる症例と一般サンプルを対象とした調査を行ったところ、PI20 の得点と複数の顔記憶テストの成績に強い関連性を見出している。PI20 は HPA をスクリーニングする指標として妥当性の高い尺度である可能性がある。そこで、本研究では、先行研究において妥当性が確認されている PI20 の日本語版を開発し、信頼性および基準関連妥当性を検討する。

方法

調査対象者 広島修道大学の大学生を対象として質問紙を配布した。1 回目の調査対象者は 156 名 (女性 91 名, 男性 65 名, 平均年齢 18.83 歳 ($SD = 1.31$)) であった。このうち、52 名が 2 回目の調査に回答した。

調査時期 調査は 1 回目を 2017 年 4 月～5 月、2 回目を 2017 年 12 月～2018 年 1 月に実施した。

Table 1
20項目相貌失認指標の項目

1. 私は、顔を見分ける能力がたいていの人たちよりも低い。
2. 私はいつも顔を覚えるのが下手だった。
3. 特徴のある顔立ちの人を見分けるのは、特徴のない顔立ちの人を見分けるのに比べて、ずっと簡単だと思う。
4. 以前会ったことのある人を知らない人と間違えることがよくある。
5. 学校では、クラスメートの顔を見分けるのに悪戦苦闘した。
6. 髪型が変わったり帽子をかぶっていたりすると、その人だと見分けるのに苦労する。
7. 新しく会った人に、私は顔を覚えるのが苦手だと伝えておかなければならないことがある。
8. 他人の顔を一人ひとり頭の中で思い描くのは簡単だ。
9. 私は、たいていの人たちよりも、顔と名前を一致させるのが得意である。
10. 声を聞かないと、その人が誰だか分かるのに悪戦苦闘する。
11. 顔を見分けることへの不安で、特定の社交的な場面あるいは特定の仕事の場面を避けてしまっている。
12. 私は、顔を記憶するために他の人たちよりも一生懸命がんばらなければならないといけない。
13. 私は、確信を持って写真の中の自分を見分けることができる。
14. 登場人物を見分けるのが難しいせいで映画のストーリーについていくのが困難だと思うことがある。
15. 私の友達や家族は、私が顔を見分けたり顔を記憶したりするのが苦手だと思っている。
16. その人が誰だか分からないことで、しばしば人の気分を害している気がする。
17. みんなが同じような服 (例: スーツ, ユニフォーム, 水着) を着なければいけない状況で個人を見分けるのは、私にとって簡単なことである。
18. 親族の集まりで、親戚同士を混同することがある。
19. たとえ見た目がかなり変わっていたとしても、有名になる前の写真から有名人を見分けるのは簡単だと思う。
20. いつもとは違う状況で親しい人に会うと (例: ショッピング中に思いがけず仕事の同僚と会う)、その人だと気づくのが難しい。

質問紙の構成

20 項目相貌失認指標 (PI20) PI20 (Shah et al., 2016) の日本語版を作成した。原版を日本語に翻訳した後、バックトランスレーションを行い、意味内容の同一性を確認した。20 項目で構成され、5 件法 (1:「全くあてはまらない」～5:「全くあてはまる」) で回答する (Table 1)。

先天性相貌失認尺度 (HP) 基準関連妥当性について検討するため、Kennerknecht et al. (2007) によって開発された先天性相貌失認尺度の日本語版 (金山ら, 2011) を用いた。

Table 2
各尺度の記述統計量および信頼性係数

尺度	N	M	SD	最小値	最大値	α
20項目相貌失認指標 (1回目)	156	52.22	12.77	22	95	.891
20項目相貌失認指標 (2回目)	52	51.63	14.081	24	84	.910
先天性相貌失認尺度	150	33.10	8.12	17	56	.801

結果と考察

まず各尺度の平均値、標準偏差等の記述統計量を算出した (Table 2)。PI20 の α 係数について算出したところ、1 回目、2 回目ともに十分な内的整合性が認められた (1 回目: $\alpha = .891$, 2 回目: $\alpha = .910$)。次に、PI20 得点の四分位偏差によって下位群 ($N=39$) と上位群 ($N=40$) に分けて、各項目について G-P 分析を実施したところ、項目 3 を除き、全ての項目で上位群の得点が下位群の得点よりも高かった ($ps < .001$)。また、再検査信頼性について検討するため、1 回目の PI20 得点と 2 回目の PI20 得点の間の相関分析を行ったところ、強い正の相関が認められた ($r = .843$)。加えて、PI20 の基準関連妥当性について検討するため、HP との間の相関分析を行ったところ、強い正の相関が認められた ($r = .748$)。

以上より、日本語版 PI20 は十分な信頼性および基準関連妥当性を備えた尺度であることが示唆される。今後は、大規模サンプルによる調査を行うとともに、日本語版 PI20 の得点と実際の顔認識能力に関連性が見られるかを検討する必要がある。

謝辞 尺度の作成において森本裕子氏、鳥山理恵氏、高野裕治氏、大久保街亜氏、Kurt Hugenberg 氏、Richard Cook 氏にご協力頂きました。深謝申し上げます。